

岩手県内におけるレクリエーションスポーツの実態

—ソフトバレーボールの取り組みについて その2—

千葉 智 行

はじめに

2004年に「岩手県内におけるレクリエーションスポーツの実態」の表題の下、ソフトバレーボールの各年齢層における活動実態を報告した。その後、レクリエーションスポーツは、種類や活動の幅を広げ多くの人々が、健康の保持増進・体力の維持向上を図ることを目的に実施してきたところである。

2007年には、岩手県知事が第71回国民体育大会（以下、国体）を招致することを表明し、同年9月には（財）日本体育協会理事会の承認を得て、開催内々定を決定するなど、県民総参加のスポーツイベント開催に向けた機運が高まった。しかしながら2011年3月に発生した宮城県沖を震源とするマグニチュード9.0、最大震度7の東日本大震災の影響から、一時は国体開催を見送る検討もなされたが、岩手県内のスポーツ競技団体や開催予定市町村、経済界をはじめとする関係諸団体から開催すべきとの強い要望が出され、「大震災からの復興のシンボルとなる大会」を開催の基本方針の一つとして掲げ、開催準備が再開した経緯があったのも事実である。

このような経過をたどりながら開催された国体では、実施要項総則において実施するスポーツ種目が規定されており、各都道府県の代表が日本一の称号を目指す競技スポーツ種目である正式種目、競技自体の普及を目指す公開競技と開催都道府県におけるスポーツの普及振興及びスポーツ活動への積極的な参加を目的としたデモンストラーションスポーツ（以下、デモスポ）を実施することとなっている。

デモスポ種目として実施される競技は、原則

として開催県体育協会に加盟するスポーツ・競技団体が実施している種目の他、スポーツ振興や開催県の特徴を生かすものを選択することが規定されている。2016年の岩手県開催におけるデモスポ種目の決定に当たっては、総則に準拠し（公財）岩手県体育協会傘下の競技団体が実施し、かつ本県の特徴を生かした種目、あるいは本県のスポーツ振興のため重点的に実施されている種目として体育協会が推薦した種目を決定してきたところである。その多くはそれぞれの競技団体が抱える専門競技の内、レクリエーションスポーツまたは、普及を図るために行っている競技として実施されている内容が多い。

平成24年10月に総務省から報告された「平成23年社会生活基本調査の生活行動に関する結果」によれば、国民のスポーツ・レクリエーション活動の実施者が20年間で一貫して低下しているとされ、文部科学省や厚生労働省においてもその実施率の向上を掲げ各種の施策が実施されてきた。その中で岩手県においても国体というビッグイベントの成功に向け岩手県実行委員会並びに開催地市町村実行委員会は選手強化や運営スタッフの養成等を実施してきたが、同時により多くの県民が国体参加できる機会を増やすことやレクリエーションスポーツを中心とした内容を実施することでスポーツの普及・振興を図りつつ、世代間交流、地域交流におけるスポーツを生かした地域・コミュニティづくりを推進すること、国体開催を契機に健康増進や体力向上を図りスポーツの生涯化を促進すること等を目的にデモスポの実施を検討してきたところであり、平成28年度に開催された希望郷いわて国体においては21市町村において29

競技が開催され、多くの県民が競技スポーツと同時にスポーツに触れる機会を得たところである。

今回、平成28年度の国体開催以前に国体開催の機運を高めるイベントや各種の開催告知が数多く行われてきた中、岩手県内におけるスポーツ活動、特にレクリエーションスポーツの取り組み実態が前回調査から10年以上を経過した段階でどのように変容したのか、また競技への参加意識やスポーツを行う環境の変化についての差異が認められるかなど、スポーツの生涯化が順調に推し進められているかどうかをソフトバレーボールの実態を基に検証するものである。

調査方法

対 象：第26回エフエム岩手杯岩手県ソフトバレーボール大会参加選手（ただし、トリムの部以上小学生の部は除く）

実施日時：平成27年11月1日（日）

調査方法：対象チーム構成員に対し質問紙を配付し、試合終了時体育館出入口にて回収

回 収 率：対象138チーム、494名中172名（34.8%）

前回と同様に岩手県ソフトバレーボール大会の参加者に対しアンケートを実施しその結果をとりまとめた。

調査実施日は、希望郷いわて国体をおよそ1年後に控えた時期にあたり、会場内においても国体開催告知のポスター掲示や、会場内案内放送等でも国体開催に向けた県民の関心を高めるインフォメーションが幾度となく流れる雰囲気の中、大会が実施され、調査を実施した。

大会内容は、主催者として民間ラジオ放送局と岩手県バレーボール協会が共催し県内のソフトバレーボール愛好者を公募しての大会開催には変更がなかった。参加選手カテゴリーでは、家族でチームを構成する「ファミリーの部」が廃止され、小学生のみでチームを構成する「小学生の部」が加えられた以外は、年齢の区分によ

る男女混合の「トリムの部」及び50歳代以上の男女混合のチーム構成される「シルバーの部」、女性だけのチーム構成の「レディースの部」の編成には変更がなかった。従来からの幅広い年齢層による愛好者が集う大会という位置づけの変更はなく、また6・9人制バレーボール競技のように競技会を中心に構成されたチームとは異なり、既存チームの枠組みにとらわれない自由なメンバー構成によってチームを編成し参加できる大会であることにも変更はなかった。

メンバー構成の自由度や年齢によるカテゴリー分けから見ても、スポーツの生涯化への導入として取り組みやすいレクリエーションスポーツの大会と判断し、実施としたところである。

アンケートの内容は、前回内容を踏襲し、参加選手であるソフトバレーボール実施者自身の経験実績や取り組み方、目的等を含め活動の様子についてたずねる項目を用意し取りまとめることとした。

回答を得たものを単純集計し、前回からの大きく異なる点に注目し、レクリエーションスポーツとしてのソフトバレーボールが置かれている現状について報告するものである。

アンケートの集計結果

1 性別

今回の回答者の男女比は図1のとおりであり、前回同様に女性の回答者が大半を占めた。この大会では女性のみでチームを構成する「レディースの部」が用意されており、大会参加チーム数にして約3分の1がこのカテゴリーの参加者であったことから回答者についても同様の構成比を示すことが推察される。岩手県内のバレーボール登録者においても、成人チームを構成している「クラブ」「ママさん」の両カテゴリーでは登録チーム及び登録選手が右肩下がりの減少傾向を示しているがソフトバレーボールではそのチーム構成員が最低4名で申込が可能であるという手軽さや既存チーム内で複数の参加が可能であることから女性参加者が多いことと想像される。また、レクリエーションスポーツが多岐に亘り選択肢増加したとは言え、チームス

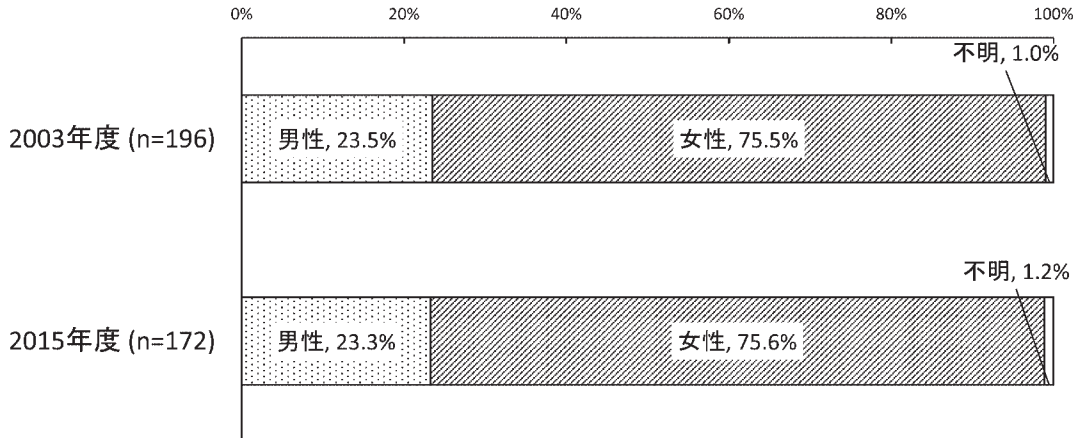


図1 回答者の性別

ポーツでは男性に比べ選択できる種目がそれほど増えていないともいえる。(図1)

2 年齢構成

前回より回答数が少ないことを考慮に入れて判断すると前回調査時に多くの人数構成を示した40歳代の年齢層は、今回の50歳代へ移行し前回の50歳代の構成成分を上回る人数を示した。この年代層は平成17年に岩手県で行われた全国スポーツ・レクリエーション祭ソフトバレーボール大会のターゲットエイジであり、当時県内各地で行ったソフトバレーボール講習会等での参加者年齢と合致する年齢層である。このことを見ると先に行われたソフトバレーボール全国大会参加に向けた取り組みが長く継続させるきっかけとなっていることが推察される。

また「トリムの部」の若年層においては、中学生の参加実績も認められた。このことは、小学校でのネット型スポーツの教材化の影響と中学校の部活動以外にスポーツをする、またはレクリエーションの中でスポーツを楽しむといった従来の部活動の取り組みとは異なった考え方が出てきたと考えられる。(図2)

3 ソフトバレーボールの経験年数

今回、回答を得た参加者の半数以上が5年以上の経験者であり、1年未満の初心者を除くと約8割は経験者であった。この傾向は前回も同

様であるが、手軽さや年齢に応じた運動負荷が得られることなどからソフトバレーボールを継続して楽しむ、プレーする参加者が多いことがわかる。(図3)

4 6・9人制の経験

過去に6または9人制を経験せず、現在ではソフトバレーボールを行っている者は全体の約3割あり、回答者の7割近くの者が過去または現在も継続的に6または9人制のバレーボールを行っており、ソフトバレーボールに取り組む導入経過において従来型のバレーボールの経験が強く影響を与えていることが分かる。

前回と異なり今回の大会においては従来の6・9人制バレーボールを継続しかつソフトバレーボール大会に参加した者の割合が半分以下に減少していた。ソフトバレーボールが一過性のレクリエーションから専門的ソフトバレーボールプレーヤーとして活動する選手が増加している傾向を示している。

これまで多くのバレーボール選手は、高校生まで行われている学校現場での部活動を終了後、「クラブ」または進学・就職先での「大学」「実業団」といったカテゴリーにおいて競技会出場を目的にその活動を継続して行われることが多かったが、近年では競技会等への出場ではなく、「バレーボールを楽しむ」、あるいは「バレーボールの仲間と時間を費やす」といったレ

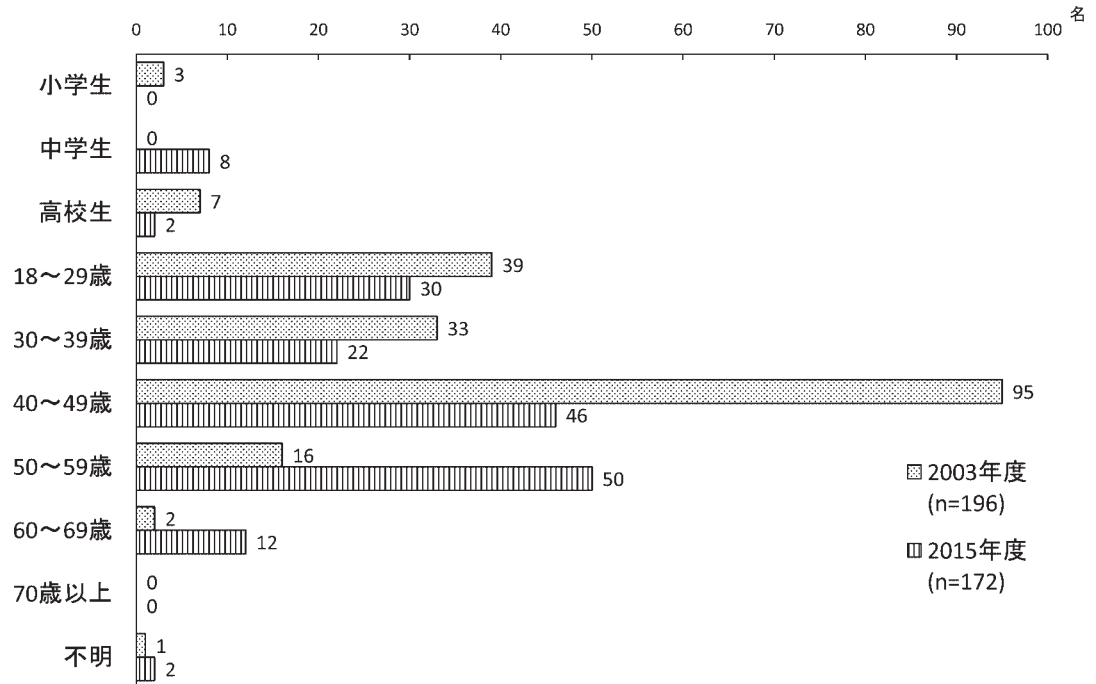


図2 参加者の年齢分布

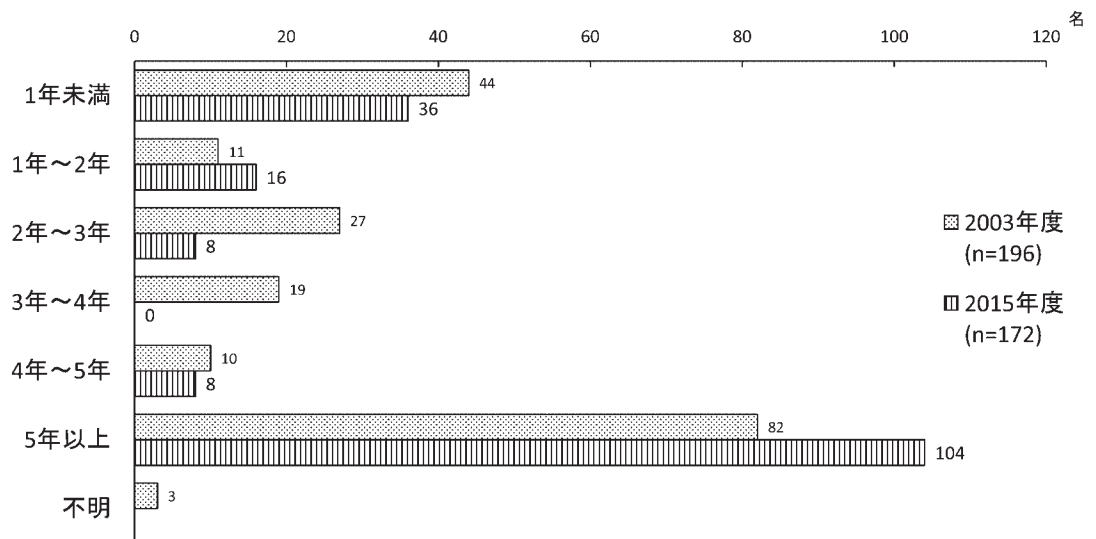


図3 ソフトバレーボール経験年数

バレーボール愛好家が増加しており、実際（公財）日本バレーボール協会への競技者登録も減少しているのも事実である。（図4）

5 活動グループの構成

参加チームの構成要因として見ると前回同様の傾向を示し、地域の仲間で構成されたチームとソフトバレーボールの専門的なチームとして構成されたチームとして参加していることが窺

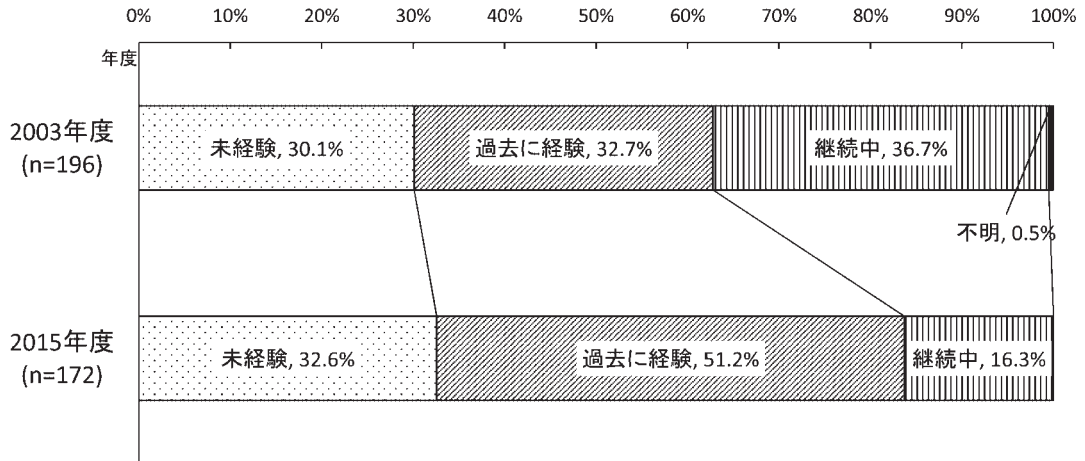


図4 6・9人制バレーボール経験者

える。

このことから、地域のスポーツ・レクリエーション活動として各種の種目が行われている中、同好の者同士または気の合う仲間といった者との活動延長といった意味合いが強いことが分かる。

一方では、前項と同様ソフトバレーボールに特化したチーム作り、仲間づくりが顕著となり、これら目的を同じにする構成員により各種のソフトバレーボール大会に参加する傾向がより鮮明になったといえる。(図5)

6 活動場所

ソフトバレーボールの活動を行う場所としては、公共の体育館と学校体育施設の利用が顕著である。前回調査では、地域の公民館・活動センターの利用も多くを占めていた。ソフトバレーボールをはじめとする各種レクリエーションスポーツの普及において、各市町村の公民館・活動センターがその役目を担ってきたが、前回調査からの年月を経てきて活動者自身が独自で活動を企画・実践できるまでに自立してきたことを考えるとその活動場所が限定されている傾向は想定しやすい。

経費について今回の調査の内容とはしていないが、地域を中心とした構成員で活動を行う場合、多くの市町村で取り組んでいる学校体育施設夜間開放を利用することで使用料等の経費負

担が軽減されることや6・9人制のように大きなスペースを要せずとも複数の活動場所が確保できるなどから学校体育施設を有効利用していることが想定される。

専門的にソフトバレーボールチームを構成する場合は、学校体育施設を利用する他、他県や所属する市町村を越えてチームを招聘しての交流大会実施や既存の競技団体によらない独自大会の開催等で公共の体育館を利用する機会も増加している。(図6)

7 活動の定期性、時間

活動を定期的に行っているかどうかについては、約8割の回答者が定期的に行っているとした。この傾向は前回と同様である。活動時間については半数以上が120分を限度に活動を行っているとの回答となり、前回調査と異なる傾向が見られた。前回調査では120分以上が半数を占めたが、今回は1割にも満たない数であった。

前述のとおり、レクリエーション活動、専門的チーム構成であってもそれぞれに所属する選手自身のソフトバレーボールスキルの向上が予想され、練習内容の合目的・合理性が確立されたこと、練習時間の効率的な利用が実施されたことなど、ソフトバレーボールの継続年数が長い選手が増加したことが練習時間の短縮に影響していることと想定される。

また、他方では勤務時間の増加や家庭環境に

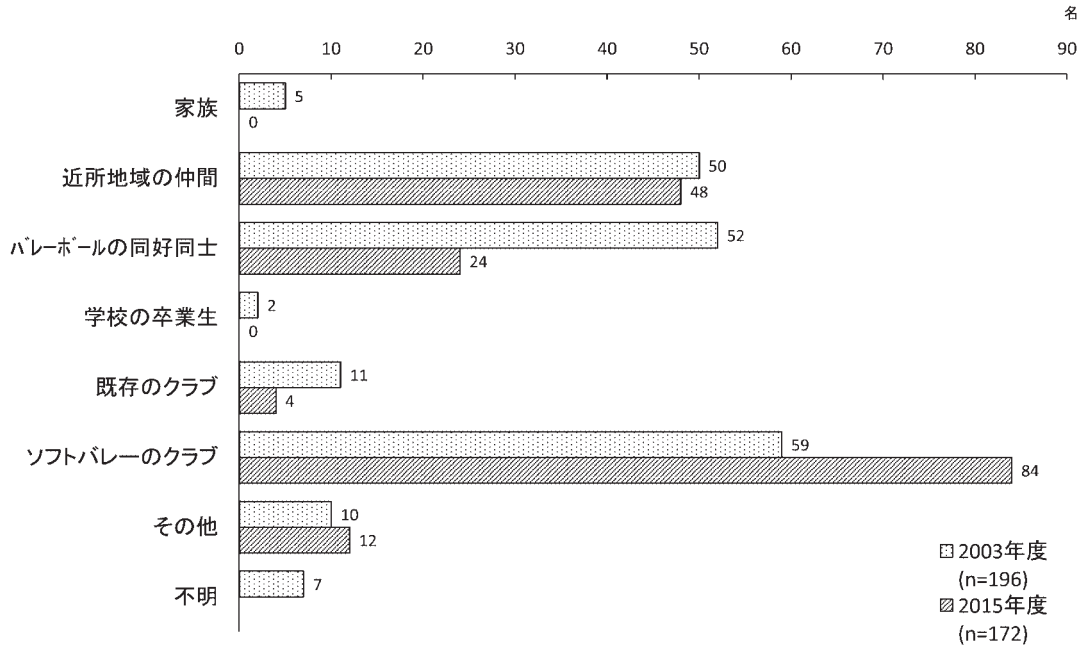


図5 グループの構成

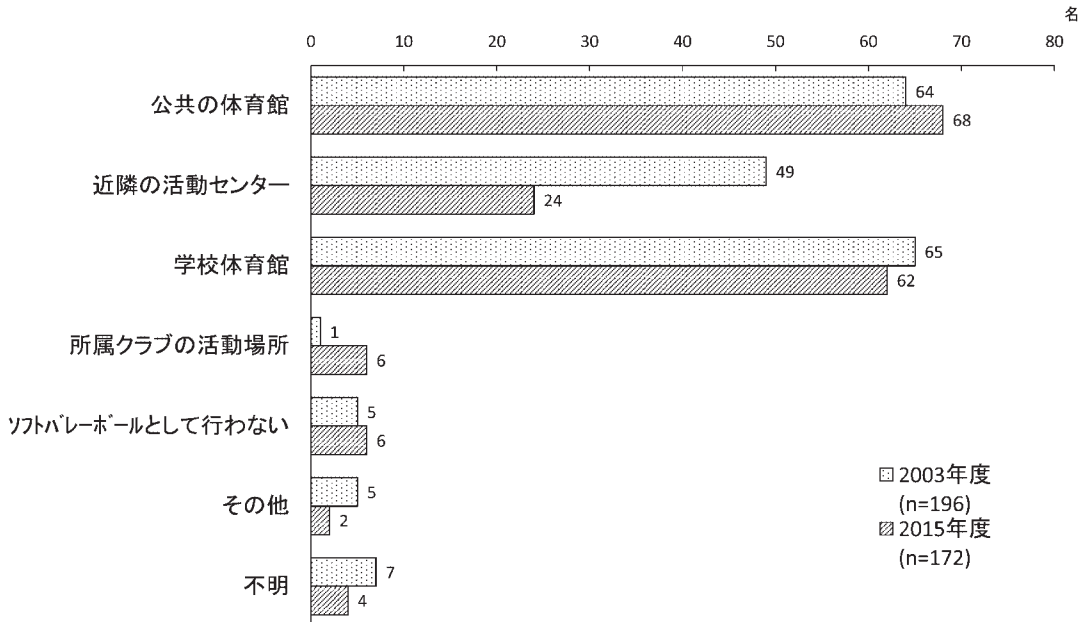


図6 活動場所

起因する余暇時間の確保が減少していることなどから、一定時間以上の練習時間確保が困難であること、施設利用における他のスポーツやレクリエーション活動を含む多目的活動との重複

調整により活動場所、時間確保が困難になったことも相まってソフトバレーボールの活動時間短縮の要因となったことが挙げられるであろう。(図7、8)

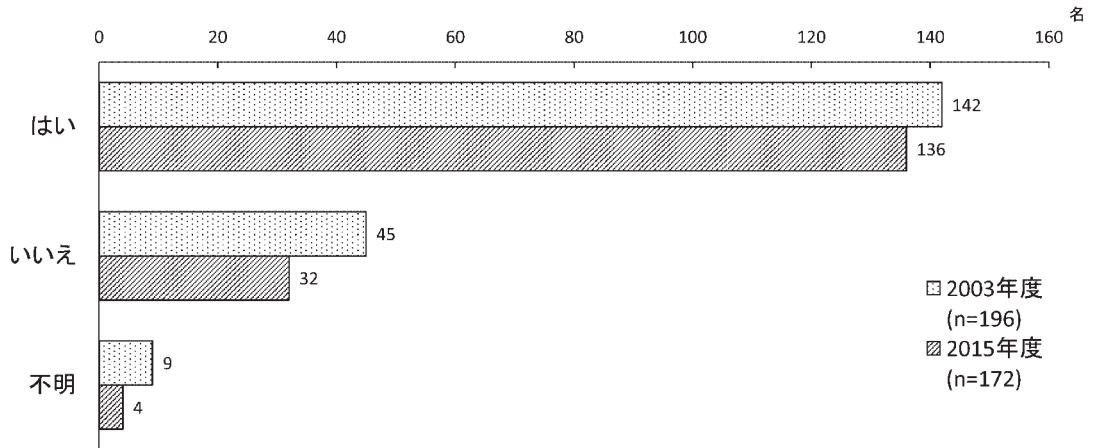


図7 活動の定期性

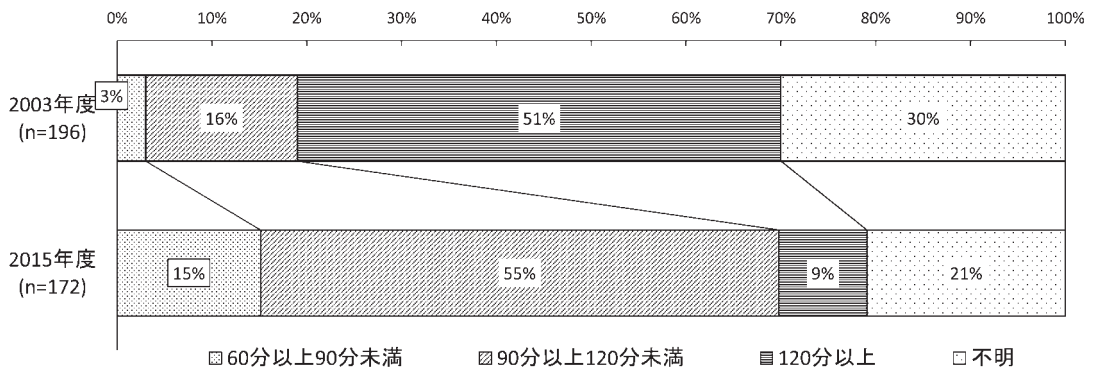


図8 活動時間の推移

8 ソフトバレーボールの認知度について

6・9人制バレーボールの経験をはじめ、バレーボールを専門的に取り組んでいなかった場合を含み、知人・友人からの勧めで行った者がほとんどであるのは前回同様である。競技志向のバレーボールから勝敗結果を特に気にせず行える気軽さや構成員選択の自由どの高さ、参加態度の決定のしやすさ等スポーツに取り組むにあたって準備する各種手続きや勝敗に関わるプレッシャーの少なさから気軽に知人友人の誘いを受けて行う傾向が強いといえる。

小学校の教材化や各種講習会がきっかけとなるケースは前回と同様に決して多いとは言えず、仲間からの遊びに誘われるのと同様の感覚で体験的に行ってみたということであろうか。導入のハードルは意外と高くはない傾向は年月

の経過があっても変化しないことが窺える。(図9)

9 ソフトバレーボールの活動目的について

前回同様、参加者の多数は健康増進・体力の維持向上をその目的に挙げている。運動機会の減少の中、定期的に身体活動を行うことは、格好の健康・体力のバロメーターとして位置付けることが可能である。

バレーボールの種々の基本技能の習得練習においては、四肢の協応動作の獲得や対人、対ボールに対応する反射や反応速度を向上させる運動が可能である。また応用技術においてはチームとしての協働作業を通じての協力性、役割期待としての意識付けを獲得するなど、各年齢層や運動能力に応じたトレーニング効果が期待され

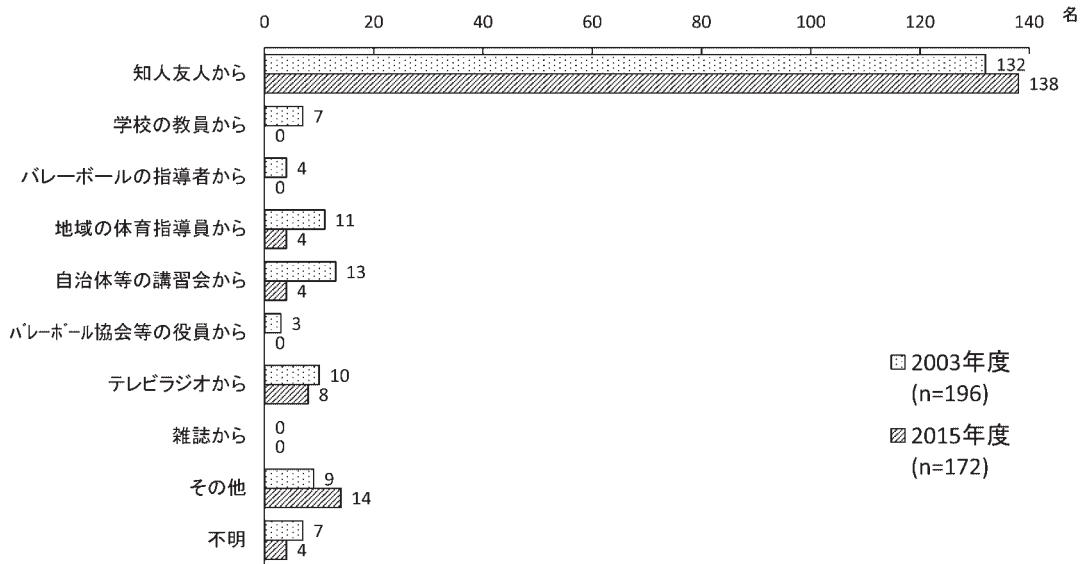


図9 ソフトバレーボールの認知

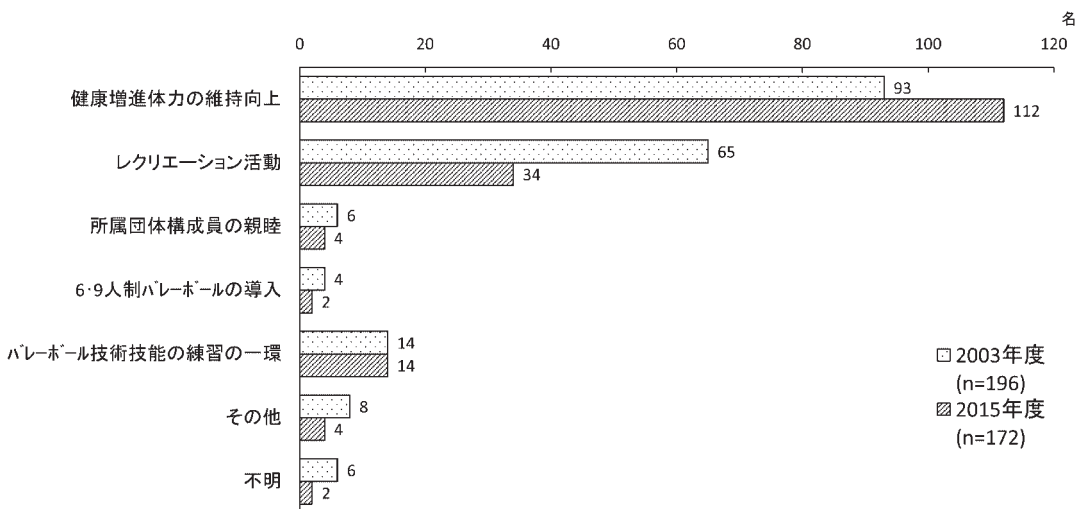


図10 活動の目的

るほか、加齢とともに衰える各種の体力要素への適度な刺激が体力の維持にも貢献していると言えよう。

また、6・9人制バレーボールとは異なるボールを利用することで、ルール範囲内で用具の特性を見極めることや、プレイヤー自身がどのような動作で打球の変化が発生させられるかといった動作を研究することもソフトバレーボールならではのあり、その延長線上でバレーボール技術開発や導入教育研究の一助となっている

ことも見逃せない。(図10)

10 ソフトバレーボールの魅力について

ソフトバレーボールの魅力については、前回と同様に少人数でできることと手軽さを挙げる者が多い。ソフトバレーボールではチーム構成単位が4名であり、6・9人制バレーボール競技とは異なり、メンバーの集めやすさ、組み合わせの容易さ、選手個々の技能程度の差を考慮にいれなくともチームを構成できるなどの例を

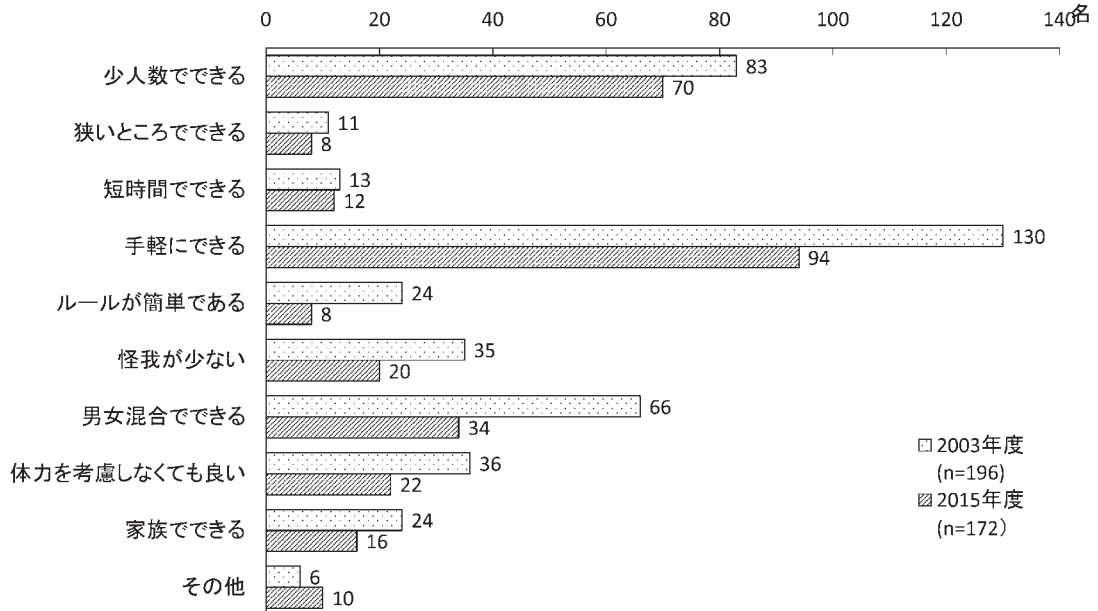


図11 ソフトバレーボールの楽しさ（複数回答可）

挙げることができる。

多くの社会人チームの場合、試合等に臨む場合に土日という週末であっても多種多様な勤務の形態により恒常的にメンバーを固定化させてチームを構成することが難しくなっている現状がある。一方では、レクリエーションスポーツの観点から、チーム構成を頻繁に変更し多くの人とのバリエーション豊かなチーム編成を通じて交流をさせることも可能となることから、少人数で構成できるが故に魅力として挙げていることが予想される。

多くの球技の中で、4人で構成されかつチームで協力して相手チームにボールを返球するというソフトバレーボールの特性は、他のネット型スポーツにはあまり見られない特徴である。仮にチームの最初の接触がうまくコントロール出来なくとも残り2回以内の同一チーム選手による接触を使ってリカバリーできれば、チームとしては積極的な返球ができないにしても失点は防げるという特徴がある。これは選手個々のボールコンタクトの不正確性責任を分散化させ、失敗即失点といったプレーヤー自身へのプレッシャーを軽減することからも手軽に取り組

める魅力として挙げていることにも繋がる。(図11)

11 ソフトバレーボール大会への参加意識について

ソフトバレーボールの大会については、今回の調査対象とした参加資格が競技団体への登録が不要なオープンな大会から、6・9人制バレーボールと同様に選手またはチームとして競技団体へ登録した者だけが出場できるクローズの大会、ソフトバレーボールのチームが独自で会場を確保し、SNSや構成メンバーの口コミによる声掛けでチームを募集するローカルの交流大会などいろいろな形態が存在する。

今回の調査においては、大会の目的や趣旨を問わず「大会」参加を目的に活動の意図があるかどうかを問うこととしていた。前回の調査においては、個人のレベルで8割を超える者が大会参加に関しては積極的または参加を検討したいという回答に対し、今回の調査では、積極的に参加及び参加を検討するという大会参加に対し肯定的に捉えている選手が5割を切っていた。また今回大会参加について他の者と相談す

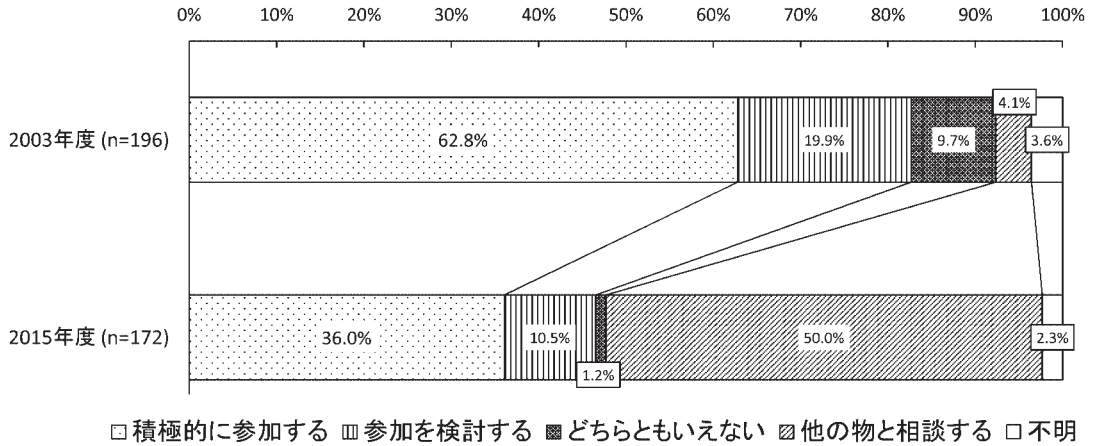


図 12 大会出場意欲

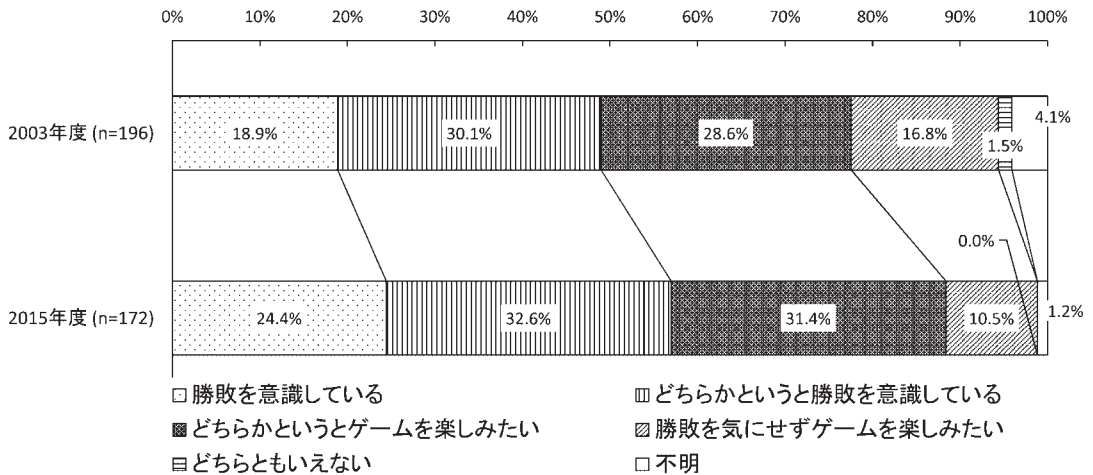


図 13 大会参加目的

るといふ個の意見よりチームあるいは構成員の考え方との調整が必要と考えている選手が増加したことが特徴的である。

大会参加の目的では、前回調査より多少なりとも勝敗を意識している者が増加しており、ゲームそのものを楽しむといった選手が減少していることが判明した。

健康増進や体力の維持向上を活動の目的として挙げている者が多く存在している一方では、「ゲームでは勝ちたい」、「大会に出場するのであればいい成績を収めたい」と願う選手も多く存在することが窺える。勝敗を意識する選手が増えている傾向は、大会参加の意思決定に際し、

チーム構成員間でのソフトバレーボールに対する目的意識のズレや大会参加に向けた意識の違いが存在し、選手の総意として大会参加の可否を決定できず、チーム内の話し合い等が増えているとみることができる。(図 12、13)

今回の調査から

今回の比較項目においては、10年以上を経過した期間を経てもソフトバレーボールを行っている年齢層や活動場所について大きな変容は確認できなかった。幅広い年齢層がそれぞれの活動場所において継続的に実施している傾向から、自身の健康や体力維持を意識しながら行っ

ている様子は、スポーツの生涯化が具体的に実施されてきていると言える。しかしながら、その一方では活動目的に大会参加や勝敗を意識するといった、競技志向の選手が増加しておりレクリエーションと競技スポーツの両側面を持ち合わせて活動している実態も露見してきた。

従来、競技志向のいわゆるチャンピオンシップを目指す内容は、6・9人制バレーボールが担ってきており、県の代表あるいはカテゴリーの代表としてブロック大会や全国大会出場といった上位大会への出場を目指す目的でチームを構成し取り組んできたところである。これらの競技志向のバレーボールとは一線を画し、「いつでも」「どこでも」「どの年齢でも」の合言葉の中、長く「楽しむ」バレーボールとして作られたソフトバレーボールが普及や振興のレベルを超え、学校体育現場でそれぞれのカテゴリーで県大会や全国大会を目指し勝敗を競う活動してきた青年層の選手が挙ってソフトバレーボールに移行していることは、中央競技団体が行っている選手登録数の減少からも推察される。これらの若い年齢層では、レクリエーションスポーツにおいても競技会と同様、順位決定及び勝敗にこだわる傾向が少なからず見受けられる。競技志向でないレクリエーションとして行うことでソフトバレーボールを楽しんで行ってきたはずであったものが、知らず知らずの内に競技化へと変容させている自己矛盾的要素も今回調査対象で表面化した。

近年、(公財)日本バレーボール協会並びに日本ソフトバレーボール連盟主催の全国大会においても競技志向色が強くなってきた。本来の主旨、目的に近づけるべく、同一の大会において複数の優勝チームを決定する方法をとるなどして、交流色を前面に押し出す工夫も取られている。同時にソフトバレーボールの普及発展や地域における組織運営のリーダーとなる役員の養成講習会の研修カリキュラムでは、ソフトバレーボールが勝利至上主義のスポーツに変容しないための大会運営・試合方法について多くの時間を割いて研修を行っている。

多くのソフトバレーボール愛好者が「楽しむ」

というキーワードにてスポーツ実践に満足感を得るには、いろいろな尺度を持って推し測ることとなるが、ゲームである以上、対戦チームとの力の差を「勝敗」でもって実感することは自然な感覚であるが、レクリエーションスポーツの側面から考えるに、これらの「勝利」は常勝であり続ける必然ではなく、構成員の多様な組み合わせによりその「勝敗」が繰り返され、プレーすること自体に「楽しさ」を実感できることこそが、スポーツの生涯化へと結びつけるものとする。

選手の登録手続きを行わずに参加できるオープン化されたソフトバレーボール大会が6・9人制バレーボールの競技会より参加人員が増加している現状や行政団体の男女参画関係部署によるレクリエーションスポーツを通じた出会いの場の提供を兼ねた交流大会の開催などを見ても、選手の交流や同一スポーツ実施の中での新たなコミュニティの創出がなされることもレクリエーションスポーツの新たな目的として役目を果たす機会となっているのも事実である。

また、希望郷いわて国体開催前年度に開催された中、ソフトバレーボールが国体でのデモスポとして開催される内容を正確に把握している関係者が少なかった印象を受けた。国体に採用される正式競技、公開競技、デモンストレーション競技のそれぞれが担う役割や目的は競技団体関係者と開催地市町村関係者は理解していたであろうが、ソフトバレーボールの実践現場においては、国体種目は日本一を決める競技種目との印象でしかなく、レクリエーションとしてのソフトバレーボールは国体の種目にはなりえないと判断していた様子が多く視えた。

このことは、平成28年度沿岸地域の大槌町で開催されたデモスポ種目として行われたソフトバレーボール大会でも、その傾向が顕著に現れ、当初は申込チーム数が伸び悩み、他のオープン大会の参加申込とは異なる状況であった。大会申込締切日が近づいても想定チーム数を充足できず、開催地実行員会関係者を心配させたことが後に報告されている。結果的には岩手県下各地から多数の参加があり予定チーム数が充

足され大盛況のうちに終了したことが報告された。ここでは、参加者はソフトバレーボールを純粹に「楽しむ」といった目的に加え、東日本大震災での被災地域の国体種目に参加するという、競技志向ではない形で参集したチームが多く存在した例でもあった。このようにスポーツ活動を通じて人的交流を深め、希望郷いわて国体がその開催方針として掲げた復興のシンボルとなりうる大会としての趣旨を理解し参加した多くのチーム、参加選手はスポーツの生涯化の目的である豊かな人間性を体現できた一つの例として挙げるができるだろう。

以上のことから、レクリエーションスポーツにおいては、その成熟に至る過程においては、「競技志向」と「楽しむ」ことが混同しどちらかに分けて行うような線引きは非常に困難であり、今後もこれらの中庸部分を参加対象者の意向や目的を見据えながら行うことが肝要であると言わざるを得ない。しかしながら多くのソフトバレーボール愛好者が自身の健康や体力に気を配りながら高齢者となっても継続する姿は、もはやスポーツの生涯化が実践され、レクリエーションスポーツが生活の一部と行われてきていることを評価すべき点として挙げるべきであろう。

スポーツ実践時間が減少している現象は、多少なりとも改善されてきているとは言い難いが、定期的な活動が安定的に行われていることや練習を含め参加し易い雰囲気醸し出しているレクリエーションスポーツが今後増加することで20数年来の減少傾向に歯止めをかけることが可能となることができうるであろう。

今回、ソフトバレーボールの実践からみたレクリエーションスポーツの実態を推察したが、今後は2020東京オリンピック、パラリンピックに向けた国内のスポーツ需要や活動実態を受け、地方におけるスポーツ活動やレクリエーションスポーツが求められる方向性を検証していくこととしたい。

参考、引用文献

- (1) 千葉智行 「岩手県内におけるレクリエーションスポーツの実態」『盛岡大学紀要』第21号 2004
- (2) 中山ふみ江 「中高年スポーツ参加者から見たソフトバレーボールの普及の現状」『教育諸学研究論集』第15巻 2001
- (3) 総務省統計局編「平成23年社会生活基本調査結果」総務省統計局 2014
- (4) 笹川スポーツ財団編「スポーツ白書2014」笹川スポーツ財団 2014
- (5) スポーツ・青少年局スポーツ振興課編「地域スポーツに関する基礎データ集」文部科学省 2016
- (6) 日本バレーボール協会編「バレーボール指導教本」大修館書店 2004
- (7) 日本ソフトバレーボール連盟編「ソフトバレー・ハンドブック」大修館書店 1992
- (8) 希望郷いわて国体大槌町実行委員会編「希望郷いわて国体第71回国民体育大会デモンストレーション競技ソフトバレーボール競技会」大槌町 2016